

「聖なるもの」を新たに迎えるという意識があったと考えられる。また、日本の神は祭祀によって変容することがあると確認されている(『祭祀の言語』)。このことから、太玉串行事の祝詞に「多々倍」「称辞」とあるので、天岩戸祭祀という神話の再現をすることによって、二度とお隠れにならない神の変容を願ったと解釈できる。

『皇太神宮年中行事』の時代まで、榊が差し替えられるのは年中四度の祭の時だけであり、九月の神御衣祭の時の榊のまま神嘗祭が行われた。『皇太神宮儀式帳』の太玉串も祭祀後置かれていったものが天八重榊であるという説もあり、また、伊勢では古い榊に対する聖性が現在も見られる(原田敏明「榊巻き」「神と社」)ことから、樹木崇拜とは違う観念がここではあると考えられる。

ミルチャ・エリアーデは、聖なる石、聖なる木は、石として、あるいは木として崇拜されるのではなく、それらが崇拜されるのは、それが聖体示現(ヒエロファニー)であるからである、と言っている(ミルチャ・エリアーデ『エリアーデ著作集』)。古代神宮において、太玉串、八重榊、宮飾りの榊は、「聖なるもの」の顕現に近い位置にあり、それらは、天照坐太神の祭祀にはなくてはならないものであった。

神話を再現するということは、神の時間へ帰入することである(『エリアーデ著作集』)、とエリアーデは言う。『皇太神宮儀式帳』には、太玉串行事は神話の再現であると記載されている。神話の祭祀は、磯部氏が奉仕氏族としての正当性を証明する為だけのものではなく、古代の人々が、天照坐太神の顕現と

永遠を願って行った姿があるのではないかと考えられる。

上代における祈りの変容

白江 恒夫

「祈る」は、上代(奈良時代とそれ以前)では「神を祈る」という表現が主で、今日普通に用いる「神に祈る」という表現は厳密な意味での用例が見当たらない。そこで、確実な仮名書き例のある万葉集と続紀宣命を用いて「神を祈る」と「神に祈る」を考えてみたい。

一、イノルの語構成と語義。イノルの語構成はイ(斎)ノル(告)で、普段口にしない特別な発言を神聖に行う意。新撰字鏡に「託。禱也。註也、イノル又クルフ」等とある。狂フとも読み得た「託・禱」の訓イノルは、一種異様な状態での発言をさしたと考えられる。

二、漢字「祈」「禱」の意味。日本語イノルには「祈・禱・祈禱」等の漢字や漢語をあてることが多いが、漢字「祈・禱」には、神に叫び告げて助力を求める意があった。「掌六祈(鄭玄注)祈、嘯也、謂為有災變、号呼告于神、以求福。」(周禮、春官、大祝)とあり、「禱祠于上下神示(鄭玄注)求福曰禱」(周禮、春官、小宗伯)とある。これらの「福」は神の助けの意(「福、説文、祐也」『集韻』)であるから、「求福」は神の助けを求める意。

三、神ヲ祈ルと神ニ祈ル。日本語イノルは、神聖に告る(呪的に言う)ことだから、「神を祈る」とは、普段口にするのを憚る神名を特に口にすることを意味した。神の助けが是非必要だ

ったので、神名を口にして呼び寄せたのだろう。対象とする神は天地神(七例)、海神(二例)、鹿島神(一例)であるが、神が何処に坐すかは漠然としていることが多い。万葉集に「天地の神乎祈りて」(巻二〇・四三七四)等があり、宣命第十三詔(七四九年)にも「天坐神地坐神乎祈禱奉」とある。これらは、いずれも動作の対象を示す格助詞「を」が「神」に下接しており、神の坐す場所は問題視されていない。一方、動作の帰着点を示す助詞「に」が下接する「神に祈る」という表現は、「哭澤の神社爾神酒据多禱祈れども」(巻二・二〇二)や「住吉の我が皇神爾幣奉り祈り」(巻二〇・四四〇八)等の如く、「神」という語と「祈る」という動作を表す語と共に供物に関する語句や時には神下ろしの装置を表す語句が併記されていて、神が何処に坐すと考えているかが明らかな場合である。また、宣命第三十四詔(七六五年)「己先靈仁祈願ヘル」は祖霊に対する場合だが、祈る対象は霊牌であらうし、それは祈る者の眼前に存する。つまり、「神を祈る」では動作(祈り)の対象だった神が、祠や社に迎えられると口に出して呼ぶ必要がなくなり、関心の中心が祈りの内容(願い事)に移った。その結果、「神に(を)祈る」という形で、神に様々な願い(祈願)をする意味になったのではないか。延喜式祝詞に頻出する「某と御名は白して辞竟へ奉る」(祈年・月次)は、「神を祈る」の延長線上にある表現だと考えられる。

四、その他。今日「某に問ふ」というところを、上代では「某を問ふ」と言った例が履中記歌謡を初め訓点資料や皇太神宮儀式帳に見られる(春日政治、西宮一民説)。「御舎乎仕奉」(祈

年祭祀詞)の例もある。また、「神祇令」は、中国とは全く伝統を異にする神祇信仰を唐の「祠令」に基づいて整理したものと言われるが、「祠令」に存する祭祀の場所の規定が「神祇令」にはない。これらのことをも併せ考える必要がある。

相嘗祭の一考察

富田 実

相嘗祭は、新穀を神様に捧げて祭ることであり、それは収穫物を得るべきに相応しい土地と共同生活を営むのに相応しい居住地にある所の特定諸社の神様に、新穀を供薦し祀る祭儀であると考えられる。近頃、約二四〇〇年前の水田跡の土を使った稲の生育実験の結果、現代の水田で育てた稲の高さは均一であるが、古代の水田は、場所毎に差が生じ、米の収穫量にも違いがあったのではないかとの研究結果が出ている。又、農地の土には、多くの水も必要ではあるが、土には養分補給の施肥と土の働きを担っている多くの微生物も存在し、「土づくり」に貢献して生産性を維持している。勿論、自然としての恵みを受けるだけでなく、耕作者が土に働きかけ手を入れ、良い土壌にする環境を作っていく訳である。相嘗祭は、天武天皇のご遺志を継がれた持統天皇が、天神地祇を祭られ、幣帛を諸神祇に頒たれたこと、又、奈良盆地の農耕に関しての祭祀、つまり、自然の災害から守り稲作の豊穰を祈る祭祀を、定例化された上で国家体制の一層の確立を計られた。稲作に、直接携わる国民に、耕作地域の農耕の収穫感謝の祭祀を斎行することで、豪族や国民に、安寧の願いの心を知らしめ、国家財政である稲作拡大の重